

# 「特別の教科 道徳」における 道徳的判断力の指導法について

—「規則の尊重」の育成を目指して—

同志社大学文学部／同志社女子大学嘱託講師

島田喜行

## はじめに

本論の目的は、「お客様」（文部科学省『小学校道徳 読み物資料（平成23年3月）』）を教材として、「特別の教科 道徳」（以下、道徳科と略記する）の内容項目「規則の尊重」を、道徳的判断力の育成という視点からどのように指導するかについて考察することである<sup>(1)</sup>。

現在、小学校の道徳教育にかんして、改正小学校学習指導要領にのっとり、『『考え、議論する』というキャッチコピー』のもと、「児童生徒が主体的に道徳科で考え、仲間と語り合い・学びあい、議論しながら、自ら道徳性を高め、より実践力を伴った志の高い生き方」を実現するための「多様な指導方法・内容」が議論されている<sup>(2)</sup>。

道徳教育をめぐるこのような状況において、子どもたち自身が考え、議論しつつ、各自の道徳性を高めていくための道徳科を指導する教員には、どのような姿勢が求められるのか、道徳科において道徳的判断力の育成を目指した指導を展開するさいに、教員として注意すべきことは何か。これが本論の主導的問いである。

本論の考察の手順は、次の通りである。まず、道徳科における道徳的判断力の定義を確認する（1.）。次に、内容項目「規則の尊重」を、道徳的判断力の育成という視点から指導するための授業を想定した道徳学習指導案（略案）を提示する（2.）。そして、提示した指導案に即して、道徳科において道徳的判断力の指導を担う教員として注意すべきことは何か、という問いについて検討したい（3.）。

## 1. 道徳科における道徳的判断力の定義

まず、「道徳的判断力」の定義を、『解説』に即して確認する。

道徳科の目標は、「人間としてよりよく生きようとする人格的特性」として、よりよく生きるための基盤となる「道徳性を構成する諸様相である道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度を養うこと」である（19頁参照）。

道徳性を構成する道徳的判断力は、「善悪を判断する能力」と定義される。善悪を判断する能力とは、さまざまな「道徳的価値の大切さを理解」したうえで、ある状況への対処としてふさわしいこと、望まれることを「判断する力」のことである。わたしたちは、この判断力を身につけることによって、「機に応じた道徳的行為」を自ら選択し、行うことができるようになる（同上）。

以上のことから、本論では、道徳的判断力を、わたしたちが機に応じた道徳的行為を自ら選択するための善悪を判断する能力と規定する。

## 2. 道徳学習指導案（略案）の提示

では、道徳教育を担う教員が子どもたちにたいして道徳的判断力を指導するときに注意しなければならないことは何か。この問いに答えるために、内容項目「規則の尊重」を、道徳的判断力の育成という視点から指導するための授業を想定した道徳学習指導案を提示する。指導案（略案）は、次の通りである<sup>(3)</sup>。

### 道徳学習指導案

学 年：小学校第5学年

主題名：公共の場でのルールへの遵守と規則の尊重

ねらい：

教材資料「お客様」で描かれる、楽しみにしていたキャラクターショーを見に行ったが、結局楽しむことができなかったわたしの経験について考えることを通して、多くの人々が集う公共の場で、決まりごとや規則を尊重する意義を理解し、自他の権利を守り、義務を果たすことが善いことで

あるとする道徳的判断力を育てる。

主題設定の理由：

小学校の高学年ともなれば、子どもたちは、多くの人々が集う公共の場で活動する機会も増えてくる。そのため、社会生活上のきまり、マナーやモラルなどの基本的な倫理観を育成することが大事になる。しかし、この時期の子どもたちは、日常生活のなかで、自他の権利や義務という観点から、公共の場での自分の振る舞い方について考えを深めることが少ない(49頁参照)。わたしたちは、子どもたちが基本的な倫理観を身につけられるようになるために、子どもたちとどのように向き合うべきなのであろうか。これが本授業の主題的問いである。

そこで、本授業では、キャラクターショーという公共の場集ったわたし・係の人・他のお客たちとのかかわりのなかで展開される、ルールを守ることの大切さにかんするわたしの葛藤を手引きにして、規則を守ることが善いことであるという道徳的判断について考えてみたい。本授業が決まりごとやルールへの「自分勝手な反発」(48頁)や「自分の思いのままに行動すること」(同上)がもたらす危険について、子どもたち一人ひとりが気づき、規則を遵守することの意義を自ら問い直すきっかけとなること、これが本授業における教師の願いである。

資料名：「お客様」文部科学省『小学校道徳 読み物資料 (平成23年3月)』

展開過程：

(導入)

このまえの休日、〇〇テーマパークで××ショーを見てきた。でも、1時間も前から並んで待っていたのに、お客さんが多くて、あまりよく見えなかった。君たちにもこのような経験がありませんか？

指導上の留意点：

授業の主題に関わる問題意識や関心を児童に持たせるために、子どもたちにとって身近な話題となるように配慮する。

(展開)

教材資料「お客様」を音読する。

基本発問：

教材資料「お客様」に登場するわたしのよう経験をした人はいませんか

か？

指導上の留意点：

基本発問に応じて、各自の経験を一人称的に語る答えが多く返ってくる  
ことが予想されることに留意する。

補助発問①：

では、わたしの心の動きをみなで確認していこう。会場に到着してから  
ショーが始まるまでの間、わたしにはどのような心の動き（気持ちの変化）  
があったでしょうか？

→ 補助発問①にたいして予想される子どもたちの答え

- ・ショーがとても楽しみで興奮気味だ
- ・観客が増えてきたため、ステージが見えるかどうか心配になってきた
- ・係の人が周りの観客にしつこく注意するので、ちょっとイライラする
- など

指導上の留意点：

わたしの心の動きに、周りの観客の振る舞いや係の人による注意が強く  
影響していることを子どもたち自身がしっかりと確認できるように配慮す  
る。

補助発問②：

ショーが始まってしばらく経ったとき、わたしの前にいた男の人が子ど  
もを肩車したことによって、わたしの周りで騒動が起こった。この騒動に  
かんして、わたしやわたしの周りにいた観客たちはどのような思いを持っ  
ていたのだろうか？

→ 補助発問②にたいして予想される子どもたちの答え

- ・わたしは、肩車のせいで前がまったく見えなくなり、嫌だと思っている
- ・男の人は、子どもに少しでもショーを見せてやりたいと思っている
- ・肩車をしてもらった子どもは、やっとショーが見えるようになってうれしいと思っている ↔ 肩車をされた子どもは、恥ずかしいと思っている

- ・その子どものお母さんらしき人は、係の人の注意を守らず肩車をしている男の人の行動について恥ずかしいと思っている
- ・係の人は、危険だし、後ろの観客の迷惑にもなる行為だから肩車をやめさせなければならないと思って注意している
- ・注意されて肩車をやめた男の人は、なぜ肩車をしてはいけないのか、納得がいらず怒っている
- ・男の人は、お金を払っているにもかかわらずショーを見ることのできないことに不満を感じ、客としての正当な権利が侵されていると思っている
- ・周りの観客も、男の人と同じような不満を感じている
- ・わたしは、この騒動のせいで、わたしの周りにいやな空気を感じている
- ・周りの観客のなかにも、わたしと同じように、いやな空気を感じている人がある  
など

指導上の留意点：

このとき、この騒動にかかわった、わたしの周りにいるすべての人の思いについて、子どもたちが考えることができるように発問の仕方に配慮する。さらに、教材資料には直接書かれていないが、肩車された子どもの気持ちや、男の人に同調しないような、わたしの周りにいる観客の思いについても推測できるようにする。

補助発問③：

注意をうけて、男の人は、しぶしぶ肩車をやめた。だが、納得がいわず、お金を払った客なのにショーを見ることのできないことへの不満を係の人にぶつけた。この不満に同調する人もいた。係りの人は、この男の人の不満にたいして申し訳ないと謝り、肩車をやめたことにたいして感謝の言葉を述べて、頭を下げた。

この一連のやりとりを見ていたわたしは、「何か、変だ」と思った。このとき、わたしは、どこを変だと感じ、何にたいしておかしいと思ったのだろうか？

→ 補助発問③にたいして予想される子どもたちの答え

- ・男の人が自分のことをお客様なんだ、と言ったことにたいして
- ・男の人に同調して、周りの観客も係の人に不満の声を上げたことにたいして
- ・係の人が男の人に頭を下げて謝ったことにたいして  
など

補助発問④：

係の人が男の人に頭を下げたとき、少し赤い顔になったのはなぜだろうか？

→ 補助発問④にたいして予想される子どもたちの答え

- ・肩車は、危険だし、後ろの客の迷惑にもなり、注意すべきこと、やっ  
てはいけないことだから男の人に注意したにもかかわらず、そのこ  
とを男の人や周りの人に納得してもらえなかったから  
など

指導上の留意点：

状況は異なるが、誰かに注意したがその注意を聞いてもらえなかったよ  
うな経験は、この年代の子どもたちにもあるだろう。そこで、発問するさ  
いには、子どもたちがそのときの気持ちを思いだし、係の人の気持ちを自  
分のこととして主体的に考えられるように配慮する。

中心発問：

さらに、別の場所では、係の人の注意を聞かずに、木に登ってショーを  
見ていた観客が木から落ちるといふさわざも起こった。結局、わたしはショー  
を楽しむことができなかった。

会場を後にしたとき、わたしはショーのことではなく、ショーが始まる  
前の係の人の注意やわたしの周りで起こったことについて考えていた。こ  
のとき、わたしは、係の人の注意や起こったことについて、具体的にどん  
なことを考えていたのだろうか？

→ 中心発問にたいして予想される子どもたちの答え

- ・どうすれば、わたしや男の人、周りの人たちみんなが満足するような  
仕方でショーを楽しむことができたのかについて考えていた
- ・係の人の注意を最初はうるさいと感じていたが、あの注意には大事  
な、ちゃんとした理由があったのではないかということについて考

えていた

など

指導上の留意点：

わたしたちが公共の場において、ルールを守り「規則の尊重」するのは、「個人や集団が安全にかつ安心して生活できるようにするため」（48頁）であることを子どもたちに気づかせるように指導する。そのさい、なぜどのように主人公のわたしが考えていると判断したのか、子どもたちが導き出した答え（判断）の理由を明らかにするための問いを投げかけるように配慮する。

（終末）

授業のねらいである「規則の尊重」についてまとめながら、今後考えるべきことを子どもたちに提示する。

### 3. 道徳科における道徳的判断力の指導法についての考察

前節の冒頭で提示した問い——道徳教育を担う教員が子どもたちにたいして道徳的判断力を指導するときに注意しなければならないことは何か——について、指導案に即して、道徳的判断力を育成するための発問の仕方に焦点を合わせて考えてみたい。

道徳教育を担う教員は、発問の仕方に注意しなければならない<sup>(4)</sup>。なぜなら、そうじて、小学校第5学年及び第6学年の子どもたちには、日常生活での行動を自他の権利と義務という観点から深く考えるという経験が不十分であるために、自分の権利を主張することが自分の思いのままに行動することであると誤解してしまうことがあるからだ（48-49頁参照）。こうした誤解を子どもたちが主体的に乗り越えていくためには、「自分中心の視点」のみならず、「相手の視点、さらに相手の将来のことまで考えた視点」にも立つことができる力を身につけることが必要である。この力は、自分だけでなく、自分以外のさまざまな立場から、「状況を判断する根拠（ものの見方、考え方）を示し、比較検討する」ことができる判断力のことである<sup>(5)</sup>。

では、子どもたちがこの判断力を身につけるために、教員は、どのようにすればよいか。それは、機に応じた道徳的行為を自ら選択するための善悪の

判断には、第一に、判断の根拠となる理由を明示すること、第二に、その理由が正しいと言えるかどうか、さまざまな立場から自ら吟味すること、という二つの条件が必要であることを、教員が発問を通じて子どもたちにしっかりと理解させていくことである<sup>(6)</sup>。

## おわりに

これまでの考察を振り返ろう。本論では、まず、『解説』に即して、道徳的判断力を、わたしたちが機に応じた道徳的行為を自ら選択するための善悪を判断する能力と規定した。次に、道徳科の内容項目「規則の尊重」についての道徳学習指導案を提示した。そして、この指導案に即して、道徳科における道徳的判断力の指導を担う教員が注意すべきこととして、次のことを指摘した。日常の行動を自他の権利と義務という観点から考える経験の不足から生じる誤解を克服するための判断力を子どもたちが身につけるために必要であるという理由から、道徳教育を担う教員は、発問の仕方に十分に注意しなければならない、と。ここで示した成果をもとに、さらに道徳科の指導法についての検討を重ねていきたい。

## 注

- (1) 本論では、文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編（平成27年7月）』を主たるテキストとして使用する（以下、『解説』と略記）。『解説』からの引用は、引用の直後にその頁数を明示する。『解説』は、文部科学省 HP ([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/newcs/youryou/1356248.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/newcs/youryou/1356248.htm)) から、教材資料「お客様」『小学校道徳読み物資料』は、文部科学省 HP ([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/doutoku/detail/1303863.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/doutoku/detail/1303863.htm)) からそれぞれダウンロードした（2017年4月1日）。
- (2) 西野真由美・他編著『「考え、議論する道徳」の指導法と評価』教育出版株式会社、2017年、8-9頁参照。
- (3) 本節で提示した指導案（略案）は、横山利弘監修、広岡義之・他編著『楽しく豊かな「道徳の時間をつくる」』ミネルヴァ書房、2015年、27頁に



記載されている「道徳学習指導案 ※略案」を参考に作成した。

- (4) 発問の重要性とそのむずかしさについて理解するさいには、『解説』81頁および、広岡義之『ボルノー教育学入門——教育実践に役立つボルノー先生の教え——』風間書房、2012年、33-34頁が参考になる。
- (5) 西野真由美・他編著、前掲書、15頁参照。
- (6) 教員が発問を通じて、機に応じた道徳的行為を自ら選択するための道徳的判断に必要な、判断の理由（根拠）の明示とその理由の自己吟味という二つの条件を子どもたちに意識させることは、道徳科における「指導の中で児童生徒が〔道徳的判断にかかわる問題に〕主体的に取り組めるような配慮」の一つである。教員は、この配慮によって、子どもたちが道徳的判断力とともに、この判断力と密接に関係する「自分で自分を指導していく」「自己指導力」も獲得することができるようになる、ということを理解していなければならない（文部科学省『生徒指導提要（平成22年3月）』）教育図書株式会社、11頁参照）。

## 参考文献

- 広岡義之『ボルノー教育学入門——教育実践に役立つボルノー先生の教え——』  
風間書房、2012年
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編(平成27年7月)』  
——「お客様」『小学校道徳 読み物資料（平成23年3月）』102-105頁  
——『生徒指導提要（平成22年3月）』）教育図書株式会社
- 西野真由美・他編著『「考え、議論する道徳」の指導法と評価』教育出版株式会社、2017年
- 横山利弘監修、広岡義之・他編著『楽しく豊かな「道徳の時間をつくる」』  
ミネルヴァ書房、2015年

なお、本論で使用した『小学校道徳 読み物資料』「お客様」のあらすじは、次の通りである。

「お客様」の主人公わたしは、両親にたのみこんで、遊園地へ連れてきてもらった。その目的は、わたしが大好きなキャラクターが出演するショーを

見るためである。このショーは、とても人気があるものだった。ショーの開始時間が近づくにつれて、どんどん観客が増えてきた。そのため、わたしは、他の観客の間からのぞきこむか、背伸びをしなければステージを見ることができなくなった。

いまや、わたしの前にも後ろにも、たくさんの観客がいる。このような状況のなかで、花壇のフェンスや木に登ってショーを見ようとする観客が出てきた。そのような観客にたいして、係の人が繰り返し注意している。危ないからフェンスや木から降りるように、と。さらに、係りの人の注意が続く。ショーが行われている間、子どもを肩車したり、ビデオやカメラを頭より上に持ち上げたりしないように、と。係りの人によって繰り返される注意にたいして、周りの観客は不満げだ。わたしもまた、注意ばかりする係りの人をころよく思っていなかった。

いよいよ、楽しみにしていたショーが始まった。開始からしばらく経ったころ、わたしの前に立っていた男の人が子どもを肩車し始めた。その子どものお母さんらしき人は、ぼつが悪そうにしながら、男の人に肩車をやめるように言った。男の人の肩車のせいで、わたしにはショーがまったく見えなくなった。

そのとき、係の人がやってきて、肩車をやめるように注意した。男の人は、肩車をしなければ、子どもがショーをよく見ることができない、と説明した。これにたいして、係りの人は、肩車が危険であるのみならず、後ろの観客の迷惑にもなるという理由で、やめるようにと応じた。だが、男の人は、なかなか注意を受け入れようとしない。係りの人がさらに注意したので、ようやく肩車をやめた。肩車をやめた男の人は、むっとした顔で係の人に言った。肩車をしてはいけないというルールには納得がいかない。わたしたちは、ショーを見るためにお金をはらったお客様なんだ、と。

わたしは、この発言にびっくりして男の人を見た。そのとき、周りから、男の人に同調する声が上がった。ショーの楽しさとはうらはらに、わたしの周りには、いやな空気がただよっていた。係の人は、少し赤い顔になって、申しわけございません、ご協力ありがとうございました、と男の人に頭を下げた。

このとき、わたしは、何か変だ、と思った。そのときだった。注意を聞か

ずに、木に登ってショーを見ていた観客が木から落ちるといふさわぎが起こったのだ。係の人は、急いでさわぎの方に走っていった。

このさわぎがおさまったころ、ショーも終わった。多くの人が笑顔で帰りたくをしているなか、わたしは、気持ちが晴れないままその会場を後にした。ショーが始まる前の係の人の注意やわたしの周りで起こったことをもう一度考えながら。